

# 集落の亭と景

## 韓国安東市素山里三龜亭と八景

山中冬彦

家政学部住居学科

(2002年9月12日受理)

### “Jong” Pavilion and “Kyong” Viewpoint in Korean Villages “Sangujong” Located in Andong Sosan and Its “Palkyong”

Department of Housing and Design, Faculty of Home Economics,  
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu City, Japan (〒501 - 2592)

YAMANAKA Fuyuhiko

( Received September 12 , 2002 )

I , はじめに.....問題の設定

#### 1 , 韓国の亭

ここで亭というのは、「楼亭<sup>1</sup>」建築などと称されるときは、床が地面から浮き、屋根の下に陰を宿して周囲に対し軽やかに吹き放たれた建築物のことである。韓国では亭子(チョンジャ)ともいわれ、宮闕・庭園・集落・住宅などの中に、あるいは、景勝の山河の中に建てられ、しばしば私たちが目にするものである。

脱俗的であり、どこかのどかな軽やかさを有するこの建築の秘められた力とでもいえるべきものを、おそらく韓(朝鮮)半島の人々は古代からよく知っていたのであろう。古く三国時代から亭名などの記録が多く残っており、今日でもなお新しく建て続けられている。

亭がその周囲にあたえる豊かな空間的な表情や構成力、亭において経験される深くひろやかな開放感は、今日都市や住宅などの空間構成や景観構成に関心をもつ私たちにとても多くの示唆を与えるものである。

#### 2 , 集落の領域とコスモロジー

様々な場所に建てられる亭のなかで本稿では集落(マウル)に存する亭を考えることにしたい。集落は伝統社会にあって人の住む最も基本的な領域であったからであるが、同時に今日でも実はその領域そのものが重層しており、亭がまさにその領域構成に深く関わっていると予想されるからである。

韓国の自然集落は多く背後から山に囲まれた緩やかな傾斜地に集村として位置し、前方には河川などの水系や水田がひろがっている。集落はこのように後ろから抱きかかえられるように左右に山すじがのび、開かれた前方を水系や山が取り囲むかたちが理想とされ、それは風水思想的に捉えられて「四神砂」などとよばれる。四神とは集落の背後の「玄武(「主山」ともいう)、前方の山や水系である「朱雀」、左方の山である「青龍」、右方の山である「白虎」をさす。集落はこのように四神砂などの形局によって遥か白頭山や、さらに遠く中国崑崙山からの地脈による生気の流れを享受しようとして来たのである。この

ようにして集落の領域はまず地勢的な限定として捉えられるわけであるが、同時にそれは上のような象徴論的な限定でもあって、風水的なコスモロジーでもある。この地勢的・風水的な領域の限定は一般によく知られており、集落に関する多くの研究の言及するところでもある。

言及されることは少ないのであるが、もう一つの集落の限定がある。上の地勢的・風水的な限定の内側、すなわち集村としての「住居(集中)域」の外周部に存する「堂山(タンサン)群」が形成する領域であり、コスモロジーである。

堂山は、韓(朝鮮)半島の基底的な信仰として風水思想を遙かにさかのぼる時代から継承されてきた巫俗(シャーマニズム)の聖域である。洞祭(部落祭)時には、少なからざる儒教の習合をみるにしても、この堂山群をめぐる歌舞賽神の祭儀(クッ)を通して集落領域は確認され、地上と天上を結ぶ巫俗的なコスモロジーがうかびあがるのである<sup>2</sup>。

さて、このような二重の集落領域・コスモロジー以外に私たちが考えてみたいのが、実は亭のもつ領域性とそのコスモロジーなのである。

### 3, 亭のもつ記文, 詩文, 八景

集落の亭は、門中(一族)が所有したものであり、儒教的な教養を背景にして上層階級がそこで宴を催し、詩を詠み、楽器をたのしみ、経綸を論じ、時局談義や子弟の教育にも用いたものである。

ところで、亭の内部には額板が掛けられており、その懸板にはその亭の設立事情などを記した記文、その亭で文人・高官たちによって賦された漢詩文などが含まれており、その亭に関する重要な資料となっている(写真1)。

さらに、興味をひかれるのは、亭で時として「八景」が詠まれたことである。

八景の先行モデルは中国宋代の「瀟湘八景」であるとされる。「瀟湘」は長江中流の洞庭湖に流れ注ぐ湘江とその支流瀟水の二流を直接にはさすが、広く洞庭湖とその南に広がる長江支流の流域全体をさすといわれる<sup>3</sup>。その八景は、

平沙雁落 / 遠浦帆帰 / 山市晴嵐 / 江天暮雪 / 洞庭秋月 / 瀟湘夜雨 / 煙寺晚鐘 / 漁村落照  
の四言詩であり、すべて「場所(上二字) + 景物(下二字)」の組み合わせである。

八景は朝鮮半島には高麗末ぐらいから受容され、様々な八詠や八景(詠も景も8とは限らず、20・30・48詠や6・10・14景など様々であるが、8がもっとも多い<sup>4</sup>)が作られた。

その場合、視点を一つとは定めず瀟湘と同じようにひとつの地域から景観のすぐれた場所がいくつかピックアップされたのであるが(例えば韓国東海岸の「閔東八景」など有名)、亭の八景の場合は亭という一点から眺められる景勝(直接には見えない時もある)を選択する点で微妙に異なっている。

ところで、八景の構成それ自体がどのようなものなのか、例えば八景の配列の順序、統合関係などさえよく知られていないのが現状である。漠然と予感されるのは、「八紘一宇」「八方塞がり」というように、八が何らかの空間的な全体を指し示すのではないかという期待である。

次に問題になるのは、集落を左右から囲む「青龍」・「白虎」などの山の峰に亭が存する場合を考えればすぐに気づくように、亭からの眺望は風水的な集落領域を越えることである。言い換えれば、「景」として詠まれた空間的領域は先に触れた風水的な集落領域や巫俗的な集落領域を超えて存することが予想されるのである。しかし、それはどのようなあ

り方でありうるのか。

さらに基本的な問題として、先に触れた詩文等は、詩を詠む主体的なあり方を通して、自然と人間、環境と人間のあり方を普遍的な位相でさし示すとも考えられることである。

本稿で取り上げる素山里の三龜亭(写真2)はこのような関心によって選択されたといえる。素山里には堂山群があり、はっきりした風水的な領域認識があり、八景をもつ三龜亭がある。そして安東金氏の世居村(代々住んできた集落)として亭や八景に関わる歴史的な資料も豊富である。

ここでは三龜亭において詠まれた詩的テキスト(主として漢詩文)を解釈するという方法によるが、ここで目指されるのは、韓国の亭や八景の「一般化」ではなく、個的・個性的なものを通して事象の可能性や普遍性に近づくことである。さしあたり本稿では亭がもつ領域性やコスモロジーの豊かな可能性と八景がもつ表現構造の可能性を見届けることになる。

## II, 三龜亭八景

### 1, 素山里の三龜亭

素山里は今日行政区域としては慶尚北道・安東市豊山邑に属しており、安東から有名な河回(ハフェ)へ行く途中、豊山邑の西3kmほどに位置している。



写真1 三龜亭の額板

東から南にかけて豊山平野に開かれ、西から北東にかけて丘陵に抱かれたかたちになっている。開かれたに東から南には洛東江の支流(梅谷川)が三龜亭の間近を流れ、3kmほど先には洛東江が曲流している(図1参照)。

ここに金氏が最初に入郷したのは始祖金宣平の9世孫金三近であったという。入郷時期は三近の没したのが1465年ゆえに少なくともそれ以前のこととなる。

三近の孫に当たる永銖が兄弟である永銓、永錘とともに、その88歳のなる老母のために建てたのが三龜亭である(1496年)。建設地である東呉峰には三つの龜に似た盤石があり、それゆえに三龜亭と名づけたという。亭に掛けられた記文(「三龜亭記」)は成俔が1600年前後に請われて記したものであるが、そのあたりの建設由来に言及している<sup>5</sup>。

今日存する三龜亭は1946年に再建したものであり、正面3間×側面2間、正面は南向き(西に30度ほど傾く)である。

集落の風水上の「主山」は北にある鼎山であり、東に伸びた「青龍」の端にあたる東呉峰に三龜亭は位置している。また風水上の「案山」は洛東江を越えて南東の山並みが見立てられたという(図1参照)。このようにしてこの集落の地勢的風水的な領域を見当付けることができる。

亭のまわりは樹林帯(いわゆるマウルスッ



写真2 三龜亭外観

プ)であるが、亭のすぐ南側の老巨樹数本が集落前方の堂山であり、もうひとつの堂山は住居域後方の外周部にある。すなわち住居域の前・後から集落を守護する形になっている。

旧暦の正月15日にこれらの堂山で洞祭がおこなわれてきた。

## 2, 八景の構造的性

まず三亀亭八景を示そう。(以下便宜上番号 i ~ viii を付す。各地点は図 1 にプロット。)

鶴嶺晴峯	-----	i
馬崖峭壁	-----	ii
縣里烟花	-----	iii
駅洞寒松	-----	iv
長郊觀稼	-----	v
曲渚打魚	-----	vi
三伏避暑	-----	vii
仲秋翫月	-----	viii

この三亀亭八景は1626年ごろ金尚容に請われて、申欽(号は象村、詩号は文貞)が詩として詠んだものである。申欽は朝鮮時代の四大文章家の一人であり、書芸家である。

そしてこの八景を詩題として次韻して、11人、12作品の八景題詠が亭内に掲げられている。11人は、李麟奇・柳根・申欽・洪瑞鳳・朴東説・金琿・尹暄・張維・申翊聖・金尚容



写真3 素山里からの鶴駕山

(2作品ある)・金養根である。これらの文人高官たちは、1600年代前半に集中するが、このなかでは嶺南八大文章家といわれる金養根のみ1700年代後半に属する。

以下三亀亭八景の内容に入るのであるが、あらかじめ次のことを指摘しておきたい。それはこの八景の際立った構成として2つづつが対になっている点である<sup>6</sup>。したがって、2つづつ対にして説明をはじめよう。

i は晴れやかに澄みわたった時の鶴駕山の峰のようすである。鶴駕山は三亀亭からみて北北東約10kmほどのところにある(写真3)。ii は切り立って峙立している馬崖の絶壁のようすである。土地の識者によれば、馬崖は今日南西およそ5kmほどにある麻崖洞付近という(図1参照)。

i では、まず鶴と亀の結びつきの妙に気づくが、老母の長生を願う亭建設者たちにとっては当然この結びつきは視野のうちにあったと思われる。しかしここでは八景が「山」から始められていることに注意しておこう。

ここで李麟奇が i 「鶴嶺晴峯」と ii 「馬崖峭壁」を題詠した五言絶句を示せば<sup>7</sup>,

独鶴冲霄漢 / 萬里駕長風 / 層峯如畫出 / 朝日射雲杠

(一羽の鶴が蒼空に / 遠くから風によって飛んでくる / 層をなす峰々は画のように屹立し / 朝の陽光が雲の間を旗竿のように射している)

崖開鏡面平 / 峽東江聲起 / 行人與飛鳥 / 皆在屏風裏

(崖は静かな水面にひろがり映り / 峽谷には洛東江の水音が立ち起こる / 旅人は飛ぶ鳥を友とし / これらすべてが屏風のように取り囲んだ絶壁の風景のなかにある)

ここで注意すべきは、後半の「馬崖峭壁」の題詠において、屏風のように立ちあがった絶壁とともに、前半「鶴嶺晴峯」と対照的に

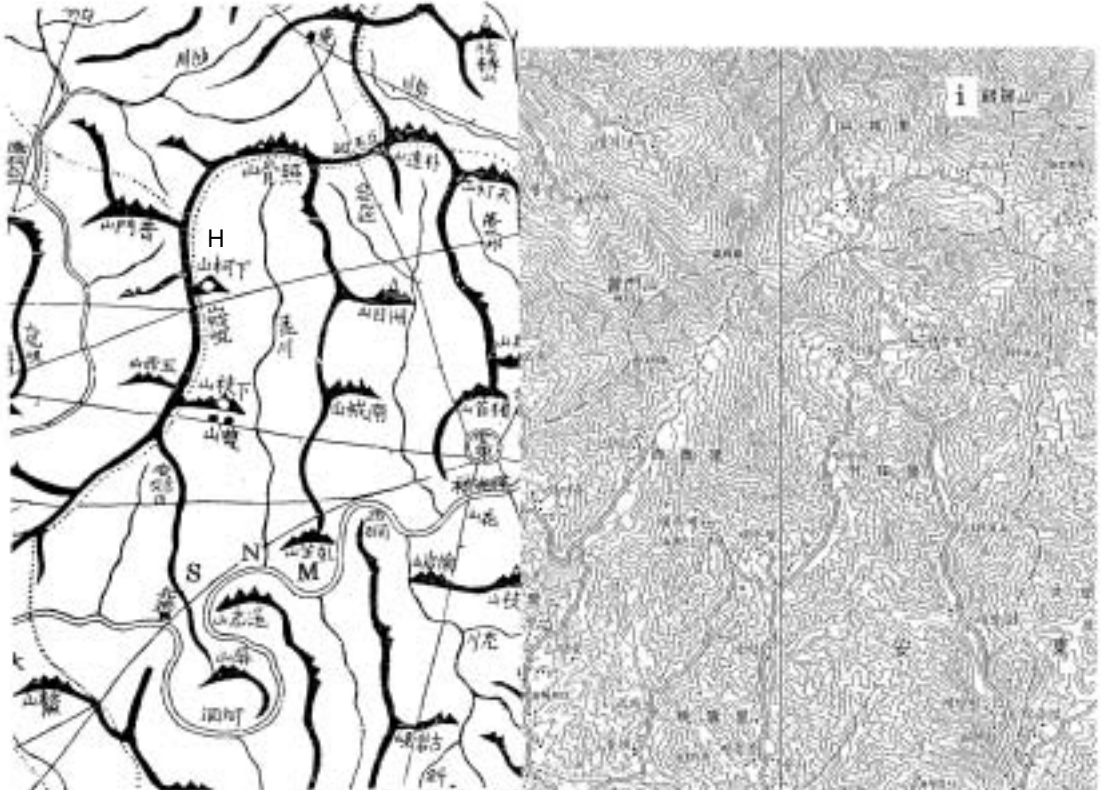


図2 大東輿地図による三龜亭八景領域の推定  
 (S : 三龜亭 H : 鶴駕山 M : 馬崖 N : 洛東江)

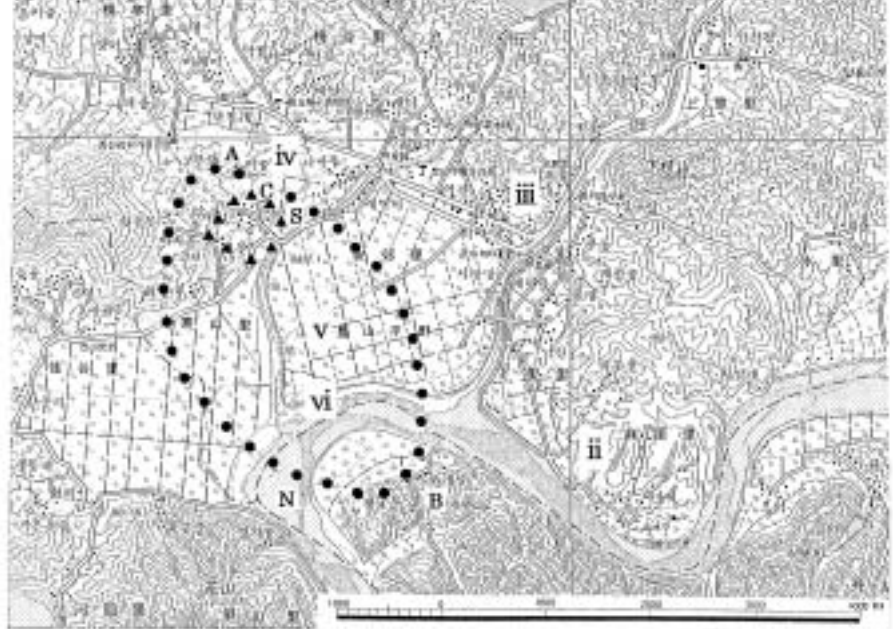


図1 集落領域と三龜亭八景(S : 三龜亭 A : 主山 B : 案山 C : 堂山 N : 洛東江)  
 ●●●四神砂による領域, 堂山による領域

洛東江(の水)が重要な空間的な要素になっていることである。そのことは、「馬崖峭壁」を題詠した多くの詩文が示していることである。もう一例申欽の題詠を一部しめせば、「可憐馬螺潭 / 層崖高萬丈 / (後略)」

ここでいう馬螺潭は洛東江にある潭(深い淵)で名を馬螺といったようで、iの鶴駕山とともに前に触れた「三龜亭記」にもしるされている。すなわち、それほどにこの亭のある場所において重要な景観要素ということだろう。八景はこの記文の後に作られたものであり、当然それを踏まえていると思われる。以上のようにして、八景のiとiiでは周囲環境として「山」と「水」が対照的にまず重要なものとして眺望の中で大きく見定められているといえるだろう。

iiiは近隣集落の春景色である。具体的には東方3kmほど離れたところにある今日の豊山邑あたりである。ivも近隣集落のひとつで北にある駅洞の冬景色である(図1参照)。

先に示した李麟奇のiii「縣里烟花」とiv「駅洞寒松」の題詠をここであげておこう。

微茫大野東 / 縹緲豊山縣 / 太平知有痕 / 烟花望中遍

(茫漠とひろがった大野の東 / 縹渺として豊山縣が眺められる / 太平であった痕跡は今も知ることができるが / 春の景色で今は満ちている)

蒼蒼萬株松 / 翠色連雲起 / 幽人夜未眠 / 寒清聞十里

(蒼々とした数多の松の / 翠色が空の雲に繋がっている / 隠者が眠られぬ夜 / 寒い風の音が遠くから聞こえてくる)

このようにiiiとivは人の住む近隣の特徴ある集落とその景物への視線であり、春の「烟花」と冬の「寒松」は対になって照らし合っている。

vは亭の南にひろがる豊山平野の豊かな秋

の実りのようすであり、viは曲江(洛東江)での漁のようすである。洛東江は韓国南部を流れる最も大きな河川であるが、これが詠まれた頃は今よりも素山里の近くを大きく曲がって流れていたという(図1は今日の洛東江の位置である)。

上とおなじく李麟奇のv「長郊觀稼」とvi「曲渚打魚」の題詠を示せば、

長郊五六月 / 處處農歌聞 / 村翁笑相語 / 禾稼如屯雲

(ひろやかな大野の五六月 / 所々に農夫たちの歌が聞こえる / 村の老人たちは談笑しあい / 稔った稲は雲集した空のようだ)

曲江東南注 / 盤迴如白龍 / 此間漁釣者 / 知是渭川翁

(洛東江は東南に流れ / 曲がりくねる様子は白龍のようだ / ここで魚をとる人は / 渭川で釣りをしていた翁(太公望)を知っているだろうか)

このようにvとviは人々の生きる基盤である土地の豊かさとその営みへの視線といえようが、おもにこの素山洞という集落の豊穡さへのまなざしと思われる。すなわちvとviは集落の地勢的・風水的領域の内を主として詠んでいるといえよう。

iii, iv, v, viはこうして花, 松, 稲, 魚, といった生命的な事象と季節的な移ろいそして他者・集落などに目が注がれるわけであるが、そのような流れの終局点が、「亭のここ」・見る人・際立つ時節を主題としたviiとviiiといえよう。すなわち、viiは夏の暑さの厳しい「三伏」時に清涼を享受している人のようすであり、viiiは「仲秋」時の月を賞でている人のようすである。

ここでも上とおなじく李麟奇のvii「三伏避暑」とviii「仲秋翫月」の題詠を示せば、  
清風四面至 / 六月疑霜晨 / 亭前冠盖客 / 俱是嚼腸人

(清風が四方から吹いて来て／六月であるのに霜が降りた明け方のように清涼である／亭の前をすぎるかぶり物をした人たちは／体の中まで暑さで苦しんでいるだろうに)

八月十五夜／天浄無埃塵／清光留醉客／涼露満衣巾

(八月十五日の夜／天空は塵埃一つなく清浄である／清かな月の光が酔った人の足をとどめ／涼やかな露は衣巾を濡らすよ)

すなわち、viiでは夏 昼 太陽 風が主題であるとすれば、viiiでは秋 夜 月 光が主題として捉えられ、ともに清浄で濁りのない雰囲気が場を占めている。

ところで、三龜亭八景のvii「三伏避暑」とviii「仲秋翫月」はユニークである。上二字で示す場所の限定がない。場所的な限定のあるi～viまでの規則を破っているのである。場所の限定のないのは詩を詠んでいる「亭のここ」だからであろう。八景のこのような例を筆者は未だ知らないのであるが、このように周囲を見ている我と、この<sup>こ</sup>こを八景に配列することによって、実は亭と八景のあり方あるいは周囲景観と私の関係をいろいろと考える道筋が見えてくると思われる。

### Ⅲ，領域・コスモロジー

#### 1，領域境界の屏風性

集落の領域としてみた時、八景の後半v～viiiは地勢的・風水的領域の内である。それに対して前半i～ivまでその外であったわけであるが、それではその外はどのようなになっているのだろうか。

まず興味深いことは、さきあげた李麟奇の「馬崖峭壁」の題詠からも分かるように、馬崖が「壁」あるいは「屏風」として捉えられていることである。すなわち連続する面的な形象で囲っている様子なのである。

たとえば、柳根の「鶴嶠晴峯」の題詠では、

「三龜石上朮斯亭／鶴駕晴光列錦屏風／(後略) (以下傍点は筆者)

金養根の「鶴嶠晴峯」の題詠では、「(前略)／松杉洗出錦屏紅／初日国師東 (国師は鶴駕山の一番高い峯をさす)

金尚容の「馬崖峭壁」の題詠では、「(前略)／朝朝対臥看真面／絶勝元暉水墨屏」

申翊聖の「馬崖峭壁」の題詠では、「馬峭峙為嶂／屹然開蒼壁／(後略)」

朴東説の「馬崖峭壁」の題詠では、「鶴駕朝元去不逢／白雲蒼壁秘仙蹤／(後略)」

題詠した半数以上のiあるいはiiに屏・壁が表現として用いられているのであるが、このことは、亭からの見られた山並みが、周囲を屏風のように仕切り、領域として画するものとして捉えられていたことをよく示している。

図の2は、金正浩の作成した『大東輿地図』(1861)の安東・豊山付近を描いたものに三龜亭・鶴駕山・馬崖の位置を推定でプロットしたものである<sup>8</sup>。この地図は主として山のつながりと水系を骨組みにして邑や交通路などが画き込まれている。白頭山から半島各地までの山の地脈の連続を重視し、もとより今日の地図とは異質であり、これ自体が一つの自然観、国土観とも言い得る。そしてこのように「山のつながり」として把握する認識のあり方は、上で私たちが見た領域境界を屏風や壁として捉える仕方と通底している。

後に見るようにこの「山のつながり」は八景の配列関係にも大きな意味をもつと思われる。

#### 2，神化的コスモロジーと八景

それではそのように限定された領域はどのような性格をおびているのであろう。

すぐ上に引用した朴東説の詩句に「白雲蒼壁秘仙蹤」とあるのが注目されよう。あるいは金琉の「鶴嶠晴峯」の題詠にある「鶴駕仙

人帰紫氛 / 空留山色與天君 / (後略)』  
(鶴駕山の仙人は紫雲の中に消え / 山色だけが天神とともに空しくとどまっている)

をあげることができる。同じように「仙鶴」(尹暄)・「玄鶴(洪瑞鳳)」という詩句もみえる。もともと鶴駕山の「鶴駕」という語が、辞書によれば「仙人の乗り物」の意をもつようであり、張維の「王子何年鶴駕遊 / 福庭千載旧名留(後略)」(王子が神仙の乗り物にのって旅に出たのはいつだったか / 幸の多い家には遠く昔からの名声が残っている)からもそれは確かめられる。このように領域を限定する鶴駕山は神仙思想的な背景を帯びている。

先に鶴駕山の「鶴」と三亀亭(あるいは三亀石)の「亀」の結びつきについて言及したが、鶴と亀は不老長生を願う「十長生図(日と月・山・雲・水・松・岩・鶴・亀・鹿・不老草)のうちの二つであって、ここには祈福道教的な世界も浮び上がってこよう。

ところでこのような神仙的あるいは道教的な姿は最後のviii「仲秋翫月」にもう一度現われる。張維の題詠に  
独憑危檻挹金波 / 無限清光此地多 / 天柱峰頭今夜望 / 玉樓瓊闕定如何  
(亭の欄干に独り凭れ月の光を掬う / 限りない清らかな光がここにみちている / 今夜天柱の頂きを眺め思う / 月の宮闕楼閣はどのように築かれたのか)

この「天柱峰頭」の「玉樓瓊闕」には神仙的あるいは道教的なコスモロジーが浮び上がっていると言えないだろうか。このような月<sup>10</sup>の世界に住むのが嫦娥(姮娥とも言う。不死薬によって神仙になり月にうつり住んだといわれる美人。)であろう。

金養根の「仲秋翫月」題詠に、  
「(前略) / 萬頃青銀海 / 千層白玉樓 / 嫦娥半笑上雲鉤 / (後略)」

(とてつもなく広大な銀河は青く / とてつも

なく高い玉樓は白い / 嫦娥はにっこりしながら雲の梯子を昇っていき)

朴東説の「仲秋翫月」題詠にも、  
「(前略) / 只願一輪終不欠 / 桂花香裏樹姮娥」  
(月が欠けないことを願うだけだ / 月の桂花の香りの中に姮娥が住んでいるのだから)

このように i の「鶴嶠晴峯」とちょうど鏡面関係のようにviii「仲秋翫月」には神仙的あるいは道教的なコスモロジーが現われる。言い換えれば八景の最初と最後の両端に同じ観想が現われるのである。しかし何故なのである。

ここで私たちは、三亀亭における鶴駕山の重要性に思い至る。鶴駕山はすでにみたように八景の冒頭に置かれていた。三亀亭は図2が示すように鶴駕山から連なった山である鼎山をまさに自らの主山としているのであり、その主山から連なった東呉峰に位置している。「山のつながり」を重視してきたこの国の人々にとって、三亀亭は東呉峰・主山によって鶴駕山と繋がることによっていわば地中の生気を享受し力あるものとして成立する。すなわち三亀亭はちょうど血脈のように鶴駕山と同一の流れの中に存し、鶴駕山と一体なのである。よって同じように垂直性・向天性をもつとともに、神仙的あるいは道教的なコスモロジーが顕わにもなると考えられる。

見方を変え八景の構成として見れば、同じように垂直性をもち、神仙的であり道教的である i とviiiの鏡像的な対応は、亭がつくる図2のような領域世界を切断した場合の領域両端の高くなった部分どうしの対応なのである。三亀亭八景の配列(メタテキスト)は亭がつくる領域世界(テキスト)とこのように対応を示しているのである。

本稿のはじめに集落のコスモロジー的な領域境界について予想したが、ここで見届けら



れたことを纏めてみよう。まず集落の住居域の外周付近にある堂山群によって緩やかに境界づけられる。それは巫俗(シャーマニズム)を中心とする向天的なコスモロジーといえる。つぎに山や川等の大きな地勢によって集落は周囲からとりかこまれる風水形局的な限定があった。そして亭からはさらにそのような集落領域を越えた山・水・集落・他者・生き物・季節などによって構成され領域が拓かれた。そしてその領域境界は山のつながりによって屏風のように捉えられ、山と亭はその同一の山系(地脈)的なつながりの中で天上方向へのひろがりとともに神仙的・道教的なコスモロジーを色濃く帯びるのである。

#### IV, おわりに

亭のもつ領域性とコスモロジーが見届けられ、八景の表現構造の可能性が探られた。しかしながら、周囲環境と人間のいわば主体的なあり方という基本的な問題は残されている。その問題の輪郭だけここで示しておきたいと思う。

亭の八景は先行モデルである「瀟湘八景」などとは異なり、亭の一点から眺めた景観といわれた。したがって人間のいる「亭のここ」を中心として、放射状の視線が対象を遠近法的に捉え、みずからの周囲に配分位置づけるものとして考えやすい。今日の私たちに親しいこのような捉え方から、八景を遠景・中景・近景を含むとして、いわば数量化してモデル化する論者もいる。

このような人間を中心するパースペクティブが亭の経験に含まれないわけではない。しかしながら本稿でみたように「亭のここ」が実は主山などの「山のつながり」によって鶴駕山に支えられていたとすると、亭にいる人間はその中心を鶴駕山に従わせているとも考えられる。言い換えれば鶴駕山こそがM・エ

リアーデのというようなコスモスの中心とも考えられるのである。鶴駕山が三龜亭八景の冒頭に配されていることの重要性はそのような意味で解することもできようし、一般の八景には「亭のここ」が入っていないことも同じように理解できるであろう。

しかし以上のような二つの見方に対して、私たちは三龜亭八景のⅰとⅱの鏡面のような配列からもう一つの見方があることを示唆される。それは景観対象と「亭のここ(すなわち見る私)」を二つの中心とみるのではなく、二つが鏡のように映しあっているあり方であり、二つが鶴駕山と三龜亭のように「山のつながり」の一体のなかにあるあり方である。

『東文選』(素山へ金三近が入郷する頃すなわち15世紀半ばに編まれた)の全州觀風樓記にある表現を借りれば、楼に登った人のあり方として「私から物におよび 物から私に到って、大和を保合し、中道を得る(…自我而物自物而我保合大和有得于中...<sup>11</sup>)」ことが示唆されている。興味深いのはそのように景観対象とそれを見る私との再帰的な関係である。

これら三つの層位を異にする私と物(景観対象)とのあり方が三龜亭においてどのように詩文として表現されているのか、それについては稿を改めて論じてみたい。

謝辞：『三龜亭板上詩文集』を発刊され、著者の不躱な質問にも快く答えてくださった安東金氏素山宗会の金琪年、金皓圭、金昌年の先生方、そしていろいろお世話をしてくださった柳漢尚先生に心から感謝いたします。

#### 註・参考文献

- 1 楼と亭の相違について言えば、亭で作った詩文のなかにも自らの場所を「楼」と詠むこともあって明確な定義上の差異はない。ただ楼の方が亭よりも規模が大きく、

- 公的であるという観念はあったようだ。例えば『東文選』全州觀風楼記には狭くて不便な亭を立派な楼に建て直すという記述がある。『国訳東文選』古典国訳叢書30 民族文化推進会編, 1966, p.115, p.280
- 2 拙稿「巡廻と境界 韓国洞祭における集落空間」日本建築学会計画系論文集538号, 2000, 269~276頁
  - 3 堀川貴司『瀟湘八景 詩歌と絵画に見る日本化の様相』臨川書店2002, 3頁
  - 4 安啓福「楼閣および亭子様式を通した韓国伝統庭園の特性に関する研究」ソウル大学校学位論文1989, p.78
  - 5 この記文は『新增東国輿地勝覧』(1530年)に紹介されている。
  - 6 漢詩として「対」的な構成は珍しくないが, 八景ではこのような構成は必ずしも一般的ではない。
  - 7 漢詩文の引用および以下の口語訳を付すに際しては, 『三龜亭板上詩文集』安東金氏素山宗会2002を参照した。なお額板の詩文と異なる時は掛けてある額板に拠った。
  - 8 鶴駕山の位置は18世紀中期に作られた『海東地図』を参考にしてプロットした。
  - 9 楼亭が神仙思想的背景を持つと言う指摘は, 李容範「韓国楼亭建築の特性に関する研究」全南大学校学位論文1994にもある。
  - 10 八景対象地に選定された景物として一番多いのが「月」であるという安の指摘は興味深い。前掲書4, p.83
  - 11 前掲書1, p.115, p.282